
貴方が私のご主人様

雨宮麗音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方が私のご主人様

【Nコード】

N1492P

【作者名】

雨宮麗音

【あらすじ】

不法投棄をされた愛玩用性的処理ロボット・マリアは、警察・睦月に出逢う。

スクラップの前に、自分の主人の幸せのみを願い続けるマリアを睦月は……。

目を閉じると、簡単に記録を見る事が出来ます。

私は人間じゃないので、「忘れる」という事が出来ないのです。

記憶を「捨てる」という事や「書き換える」という事は出来ても「忘れる」がどうしても出来ないのです。

私の製造の行程内には、感情がプラスされていたらしいです。最低限の感情を私達に持たせる理由は、感情がなければ優しさも生まれないからだそうです。

目を開けると、見知らぬ男が座っています。

回線がまだ繋がれている私の事を、椅子に座って見下ろしています。

「君の事をお話し下さい。」

フチのない眼鏡に、細身のスーツ。男の眼は、とても鋭くて怖い。製造番号9174、ご主人様は、私をマリアと呼んでいました。」

目を閉じると、すぐにご主人様の顔が浮かぶのです。ご主人様は優しいような顔立ちをしていて、とても温かな人でした。

今、目の前にいる男とは違う、優しい表情をした人でした。

「初めまして、マリア。僕は警察の前嶋睦月と云います。」

彼は、私の目の前にスーツと手を出しました。表情がないと思っていましたが、ちゃんと笑う人でした。

私は彼の手を両手で握りました。

「前嶋さん？ それとも睦月さん？ 宜しくお願いします。」

彼は笑いました。

「睦月で良いですよ。僕もマリアと呼びますから。」

私は微笑みました。

「睦月。宜しくお願ひします。」

睦月は、笑って私の回線を弄りました。

「君の様に、人らしい愛玩用の子は僕は初めて見ます。正直、戸惑

っています。だから、君にこんな話をするのは少し……。」

睦月は、私を人と接する様に対応してくれる人でした。

「解っています。不法投棄の事ですね。ご主人様については、私からは教えられません。」

睦月は、とても悲しそうな顔をしました。何故彼がそんな顔をしたのかは、私には解らなかつたのです。

「君は、とても忠実ですね。良い子です。」

ダッチワイフが出来上がり、ダッチワイフが動く様になり、更にはダッチワイフが身の回りの世話迄する様になったのは、私が出来る十年前の事でした。

私たちから派生して、家政婦になるものだったり、仕事をするものだったり、労働をするものだったり、様々な私たちの仲間が産まれました。

私は、愛玩用性的処理と家政婦がプログラムされています。

愛玩用性的処理タイプは男型と女型に分類されます。

どちらとも、持ち主に都合の良い様に作られます。

愛玩用性的処理タイプは、感染症を防ぐ為、殆どは処分されてしまいます。

ごく稀に拾われる事もあるとは聞いていますが、殆どが処分されます。

けれど、処分にもお金がかかってしまうので、違法に投棄される事があります。

そういう時は、私たちから、持ち主を調べなければいけないのです。

つまり、今はそういう時なのです。

私は、ご主人様に捨てられました。理由は知っています。私が必要なくなったからです。

ご主人様には、人間の恋人が出来ました。とても綺麗な人でした。

彼女が来てから、ご主人様が私を抱く事は、めっきり減りました。彼女も、私を余り見たくない様子でした。

何時か廃棄されるだろう、と思っていました。

ご主人様との最後の記憶は、激しいセックスです。

何時もなら、ご主人様を御奉仕する事から始める事なのに、ご主人様が私の性器に唇を当て、舌を入れ、私に奉仕をしました。

恥ずかしいのに、気持ちが良いのに、なんとなく悲しさが伝わってくるのです。

私は、ご主人様に捨てられる覚悟を決めました。

気が付くと、私はゴミ溜めで目を覚ましました。

それが最後の私の記憶です。

ご主人様の事を調べるには、私の頭の中のデータを引っ張り出して、手掛かりを探さなければいけません。

その作業は、とても気の長い作業なので大変です。

睦月は、ひたすら私の横で、パソコン相手に頭を抱えています。

「睦月？ 大丈夫ですか？」

私が問い掛けると、睦月は笑います。睦月の笑顔が、一律である事に気付きました。

「大丈夫ですよ、マリア。心配は御無用。それよりも君は、自分の廃棄についてちゃんと考えるべきじゃないんですか？」

睦月は、そう言っただけ私の方を見ました。

「私達が必要ではなくなったという事は、ご主人様が幸せになったという事でしょう？ 何も怖くなんてありません。」

睦月は目を真ん丸く開いてため息を吐きました。

「人間は、本当に欲深くて自分に都合のいいもんばかり作り出すもんだな……。」

睦月は、そう吐き捨てると、溜息を吐いて、またパソコンで向かい合います。

私は、立ち上がりました。

「マリア？ 何処に行くの？ 此処から君は出れないよ。」

睦月は私の目の前で鍵をちらつかせて見せるのです。

「何処へも行きませんよ。ちゃんと居ますから。」

私は、そう言ってコーヒーを入れて睦月に持って行きました。

睦月は、そんな私を見るなり、また切なげな顔をしました。

「……有難う。」

私は笑いました。そしてまた、目を閉じます。

目を閉じれば、ご主人様の残像が見れます。ご主人様が私を撫でる手の感覚や、唇の柔らかさ。

もう二度と、触れてもらえないものの感覚が、思い出せるのです。忘れる事が出来ないのなら、掘り返すしかないのです。

私達は、人間ではないので、一人の人の元につき、持ち主が死ぬか自分が壊れるまで、生涯を共にするか、飽きられて捨てられるかしかないのです。

中古品になって売られるのは、本当に一握り。

私たちに決定権はないのです。選ぶ権利は、私たちに無く、選ばれるのをただただひっそりと待ち続けるのみなのです。

ご主人様から、人間は、とても自由だと聞きました。相手を選べるから自由だと。

「マリアは、俺のどこに来て幸せ？」

ご主人様は、私にそう言いました。私は、静かに頷きました。

ご主人様は笑って、私の頭を撫でました。私はとても嬉しくて、幸せでした。

道理では解っているのです。ご主人様に対する感情はプログラムされたものである事も、人の手によって作られたものであるという事も。

ご主人様がなさる事は、全て喜びになって私にかえってくる事がプログラムされているのも、私はよく解っていたつもりでした。

けれど、感情はやはり、苦しいものです。

私は今、ご主人様に対して愛情を持つ様にプログラムされています。

つまり、今、私はご主人様を愛しているのです。けれど、どんなにご主人様を愛しても、私に決定権は、ないので

す。勿論、ご主人様に今すぐ逢いに行きたいです。抱きしめて貰いたいです。唇に触れたいです。けれど、それすら許されないので。ご主人様の命令は「絶対」です。言い付けは守らなければいけません。

何より、大好きなご主人様に迷惑だけはかけられません。捨てられたものが、我儘で、ご主人様の元へ行くなど言語道断。私たちには、私たちの仕事をする義務があるのです。

だから、私は私に対し、それを許す訳にはいかないのです。

「マリア。」

名前を呼ばれて目を開けます。睦月でした。

ほんの一瞬、ご主人様の様な気がして、悲しくなってしまうました。

「はい、睦月。どうしました？」

私が笑うと睦月は恥ずかしそうに笑いました。

「コーヒー、美味しかった。」

睦月は、そう言いながら恥ずかしそうにカップを私に手渡ししました。

「でも、次からは角砂糖を二つ入れてください。ミルクは要りません。宜しくお願いします。」

私は、少し嬉しくなっただけで笑いました。

ご主人様に捨てられてから、人にこの様な形で必要とされたのは初めてです。

誰かに何かをする事ですが、私たちは幸せを得れないのです。

睦月は、私の中に残っている映像を漁っていました。

私の目から記録されたご主人様の過去の映像がパソコンの中で動いています。

私は急に懐かしくなり、悲しくなりました。

睦月は、パソコンの画面を切りました。

「どうしましたか？」

私が聞くと、睦月は自分の爪を噛みながら溜息を吐きます。

「君の前で、こういう事をしてっていると、どうしても気が引けるんです。」

私が首を傾げると、睦月は困った様に笑いながら、私の頭を撫でました。

「そういう笑顔もするんですね。いつも、笑い方が同じだったので心配でした。」

睦月は目を見開いて言いました。

「……君は人間よりも人間らしいから本当に困る。」

そう言っただけを離れ、ブラインドを開けました。

窓から光が差し込んで、睦月と私を照らします。

「もつと君の事を、教えてください。」

睦月がそう言いながら、私の顔を覗き込みます。

「私は、愛玩用性的処理タイプで……」

「そういうことを聞こうとは思ってないです。」

睦月は、私にそう言い放ちました。

私は困ってしまいました。

でも、本当は解っているのです。睦月が何を私に答えて欲しいのかなんて、よく解っているのです。

例えるなら、何が好きか。お菓子でも、本でも、御洋服でもなんでも良いのです。

けれど、私には、それは無いのです。困った私は言いました。

「……ご主人様が……好きです。」

睦月は、困った様に笑ってから、静かに爪を噛みました。

人によっては、より人に近付ける為に改造に改造を重ねます。

プログラムを解除して、怒ったりする様にする人もいます。

けれど、本来ならば原則的に私たちは人を傷付けてはいけません。それはある領域を超えると違法になります。

その領域に達すると、好き嫌いが極端に出たりします。

私たちに好きはあります。私たちの好きは沢山あります。でも、嫌いはないのです。

「自分を捨てた人間を、好きとは僕は言えません。君は凄いですね。」

睦月は、そう言って私の頭を抱き寄せました。

「そうプログラムされています。だから、そんな事は私には出来ません。」

私がそう言うと、睦月は私の額にキスをしました。

同情である事も、よく解っていました。

「有難うございます。」

こういう時に切なくなるのも、私の中にある感情のプログラムの所為でしょう。

睦月は、私を放して部屋から出て行きました。

パソコンの前に来て、パソコンの電源を入れました。それから回線をパソコンに繋ぎ、私の回線から、パソコンに映像を映し出しました。

画面越しに見る、ご主人様の映像を見ながら、私は幸せな気持ちに浸っていました。

目を閉じた時に見るご主人様の映像は、何処か現実味のないものでした。

だから今、画面越しに見るご主人様の映像は、ご主人様と一緒にいた時間が、泡沫の夢の様なものではないと感じられて、幸せな気持ちになれるのです。

睦月が部屋に中々かえって来ないので、私は目を閉じました。

どれ位の間、シャットダウンをしていたのでしょうか。気がつくのと、私の座っている机の横で、睦月が机に突っ伏して眠っていました。

私は、睦月に近くにあったブランケットを掛けて、またシャットダウンをしました。

気が付くと、睦月は既に起きていて、私の頭を撫でてくれました。「有難う。」

睦月はそう言って笑いました。

私はその場を離れようとした時、睦月が私の手を掴みました。

「……少し、傍にいて下さい。お話でも、しませんか？」

私は微笑んで、睦月の横に座りました。

「今日、スクラップにしたのは、四台なんですよ。」

その時、睦月が煙草を口にしました。

「あら、どういう事ですか？」

私が笑うと、睦月は静かに煙草の煙を燻らせました。

「不法投棄の子を四台、殺してしまいました。」

現状を理解して、私はきゅっと睦月の手を掴みました。

「……僕が潰した訳ではないんです。勿論。僕は彼女達の中から、

情報を掻き出して、不法投棄の違反を取り締まっただけなんですが

……結果的に彼女達はそうなってしまいました。」

私は、左手で睦月の手を握り、右手で睦月の頭を撫でました。

睦月は、懺悔を終えた子供の様に、怯えた瞳をしました。

「怖いんですよ。彼女達はどんな気持ちで潰されてゆくのだろうか、

と。彼女達は、本当は、僕を恨んでいるんじゃないか、と。」

私は笑いました。

「大丈夫です。皆、ちゃんと解つていきます。ご主人様が私たちを必要としなくなつてしまつたら私たちの仕事は終わつたんだつてわかっているんだから、安心してください。」

睦月は切なげに笑いました。

「君達は強いね。僕は、人の姿をしていて、話をする君達を機械だなんて考えられない。だから、簡単に君達を棄てる人間が、怖くて仕方ない。」

睦月は、そう呟きました。私は、そんな睦月に微笑みかけるのが精一杯でした。

解っているのです。本当に辛いのは、私達ではない事を。

人の形をして、声を発し、恋をして、傍に居る私達を、人としていいえ、時としては人以上に大切に感じるのです。

要らなくなっても、情は残る。棄てるのにも、壊すのにも勇気がいる。

こうして、睦月の様に私が捨てられた事を怒ってくれる人もいます。勿論、私が廃棄される事に対して、理不尽だと思ってくれる人がいる事も解っているのです。

だからこそ、余計に感じるのです。誰がご主人様を守れるのか、と。

捨てる側が悪いというのなら、私達を作り出した事こそが本来ならば罪でしょう。

人の形をした、人ではない「感情のある機械」がいるのは、きつといけない事のはずです。

けれど、私達は求められてしまったのです。だから、生まれたのです。

私達は「求められる為」に生まれました。求められて、ご主人様に出会いました。

ご主人様が私達を求める事が、私達の「願い」なのです。

願い通りに沢山求めていただきました。沢山沢山幸せでした。けれど、物事には必ず終わりがくるのです。

私を捨てた事で、ご主人様が責められるなら、それは、とても悲しい事です。

私は、ご主人様に出会えて幸せでした。

私がこうして、ご主人様に棄てられる事は、現代世界の理なのです。

睦月が言った様に、私達は人間そっくりの容姿をしています。

それを捨てるという事が、どれくらい辛い事なのかは計り知れないです。

私は、人間ではないので、人間の気持ちちが微塵も解らないのです。人間が私達の気持ちちに対して、中々理解が持てないのと同じです。

だからきつと、ご主人様は辛かった筈。

捨てるという事は、もう会えない事だと、ご主人様は解っていて私を捨てるのです。

それがどれ程辛い事なのかは、プログラムされている感情が教えてくださいました。

感情が無かったら、優しさは生まれない。感情が有りすぎたら、憎しみが生まれてしまう。

私達は調度良いバランスなのです。

睦月との会話にも慣れ、一週間が過ぎました。

時が経つにつれて、私も隣には睦月がいる状態に慣れはじめていました。

睦月の事を覚えました。

コーヒーに角砂糖を二つ、紅茶には、レモンもミルクもいらなくてストレート。実は甘いものが好きな事。

黒っぽい色の服を好む事。心を開くと、よく笑うこと。よく怒ること。悩んでいる時に爪を噛む癖……。私は、睦月を学びました。ご主人様以外の人の情報をこんなに細かく覚えたのは初めてでした。そんなある日のことでした。

睦月が余所余所しい態度で、私の所へ来ました。

「此処の道は〇〇町の公園だね？」

私は、パソコンの中を覗き込みます。

「はい。どうしました？」

睦月は、静かに溜息を吐きました。

「マリアのご主人様は、この近所のマンションの七階に住んでいるね？」

私は黙りました。そうです。その公園は、まだご主人様と一緒にいた頃に二人で遊びに行っていた場所でした。

睦月がパソコンの中の画像を出しました。

ご主人様が公園の中に立っている姿がそこには映し出されていませんでした。

「これが、君から出てきた映像なんだ。マリア、君のご主人様に間違いはないね？」

私は、黙る事しか出来ませんでした。

ご主人様が逮捕されました。

今は裁判が行われているところで、裁判が終わり次第、私はスクラップにされる様です。

私は、ご主人様に会う事は出来ませんでした。けれど、私の事を聞かれて、ご主人様が嘘をつかず、廃棄した事を正直に認めた事が私は、とても嬉しかったのです。

私の所為で、ご主人様が檻の中に入ってしまったのは、すごく心苦しいです。

けれど、彼は私との日々を、ちゃんと認めてくれたのです。

私の泡沫の夢等ではなかったのです。

私は、ご主人様に出会えて、本当に良かったと思いました。

もう、スクラップにされても、怖くなんてありません。

けれど、ふと、窓の外を見上げて思うのです。

睦月は、私がスクラップになったら、ひどく悲しむのではないかと。

目を閉じて、睦月の残像を巡らせます。

悲しそうな顔の睦月が浮かび上がります。

私は、睦月と話がしたいと思いました。

どうすれば彼に、スクラップになる事は辛くないと伝えられるのか悩みました。

その時、私がいる部屋のドアがノックされました。

「はい、どうぞ中へ。」

ゆっくりと、知っている顔立ちの男性が部屋の中に入ってきました。

彼は私を見てから笑いました。

「お疲れ様です。9174。君に伝えなければいけない事があります。その前に君は僕を覚えているかな？」

優しい笑顔で、年配の男の人です。スーツではなく、ジーンズにシャツというラフな格好をしていました。

男は、私の製造番号を口にしました。製造番号で呼ばれる事は滅多にないので、私は驚きました。

「失礼ですが……貴方は……。」

男は私の頭を撫で、私の傍に座りました。

「僕は、君のお父さんの様なものです。」

私は、とても驚きました。

「貴方が私たちを造っている方なのですか？」

彼は、それに対して、にこにこ笑っているだけでした。

「まずは、君に質問があります。捨てられて、君はどう思いましたか？」

私は、笑いました。

「ご主人様は幸せになるんだろうな、と思いました。もう、私の役目は終わったんだろうと思いました。ご主人様に幸せになってもらいたいと思いました。」

彼は、少し考えた顔をして言いました。

「君は真面目だねえ。そして、とても忠実だ。じゃあ、今、心残りなく、スクラップになる事は出来るのかい？」

その質問で、私は動けなくなりました。

男は、私の動揺に気がついて、笑いました。

「誰か、傷付けたくない人でもいるんですか？」

私は、何も言えない儘、男を見つめていました。

「人に必要とされたなら、残りたくなるのが君達のプログラムですからね。」

私は、黙って手の甲を見つめていました。

どれくらい沈黙が続いたのでしょうか。男はゆっくりと口を開きました。

「君を、引き取りたいという人がいます。」

私が顔を上げると、彼は笑いました。

「きつと、その傷付けたくない人は喜ぶと思います。愛玩用を引き取りたいなんて人は、滅多にいないんですから。良かったですね。君は幸せな子です。新しくプログラムの設定をしましょうか。」

私の頭を撫でてから、彼は出て行きました。

私は、睦月を待ちました。睦月に、私はスクラップにならない事を話す為に、睦月を待ちました。

けれど、睦月は来ませんでした。睦月はやって来ませんでした。

そして、プログラムを設定し直す日になりました。

新しいご主人様の要望により、私は、そのままの記憶を持った儘、プログラムを新しいご主人様に向けて改善されました。

私がシャットダウンされている時に弄られているので、何がどう変わっているのかは、正直解らないのです。

センターから、真っ白なドレスを貰いました。まるで、ウェディングドレスの様な可愛らしいロングドレスでした。

静かに、新しいご主人様を待ちます。

そんな中で、睦月は今、何をしているのだろうかと、考えました。私の頭の中で、睦月が笑っています。

睦月に逢いたい。今、すぐに、睦月に逢いたい。

私の中が、異常な程に、睦月で溢れかえっていました。

新しいご主人様に引き取られる事が、とても切なく感じられて、初めて新しい感情に襲われました。

眼から沢山の液体が溢れ、止まらないのです。

私は、この感覚を知らないのです。

睦月に逢いたい。逢いたくて逢いたくて仕方ない。

昔、昔のご主人様が、映画やテレビを見ている時に、たまにそれを流していました。

私は、ご主人様からそれが流れると、不安で仕方なくなりました。ご主人様は教えてくださいました。

「マリア、これは泣いていうんだ。悲しい時や嬉しい時に、眼から溢れてくるものなんだ。」

私は、初めて涙を流していました。その涙は、悲しみの涙でした。私は、睦月を愛してしまいました。なんのプログラムの誤作動かわかりません。けれど、愛しているのです。

その時、ドアが開きました。私は強張りました。

新しいご主人様に、私はちゃんと笑わなければいけない。

睦月の事を忘れなければいけない。

笑顔を作り振り返ると、私は言葉を失いました。

「マリア、人間らしくなつたな。」

その日に限つてらしくない、白いネクタイをした睦月が、私の前で笑うのです。

「睦月……何故……？」

睦月は、急に私を抱きしめて言いました。

「ご主人様が迎えに来たよ。マリア。」

私は、ひたすら泣きました。睦月、いいえ、ご主人様の胸で。

「マリア、笑つて。」

私は、ご主人様の命令通り笑い、言いました。

「愛しています、ご主人様。」

ご主人様は、私を抱きしめて、そつと私の唇にキスをして下さいました。

「ごめんな。余計な事をしたか？」

睦月は言いました。私は首を横に振りました。

「解ってるんだけど、好きになつちやっただ。愛も夢も全部、作り物なのも解ってる。だけど、マリアが欲しかった。」

私は、静かに笑いました。

私が、作られたものである事は、変わり様のない真実なのです。

私が人間になれる事はないのです。

私は生身の体を手に入れる事は出来ません。

けれど、私を求める心は本物であり、ご主人様を愛する心も、神

様の手によって作られたものであるか、人間の手によって作られたものであるかの差でしかなく、本物なのです。

朝になったら、コーヒーを入れましょう。砂糖は二個ですね。

甘いパンを食べてばかりいたら健康に悪いのでちゃんと止めなくては。

そして、起きたらキスをしましょう。沢山沢山キスをしましょう。今は、ゆっくりと私の傍で眠っていて下さい。

貴方が私のご主人様。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1492p/>

貴方が私のご主人様

2010年12月15日06時10分発行